



A FILM by Megumi Sasaki
HERB & DOROTHY 50X50

ハーブ&ドロシーが ふたりからの贈りもの

【監督・プロデューサー】佐々木芽生
【出演】ハーバート・ドローシー・ボーゲル、リチャード・タトル、クリスト、ロバート・バリー、
バット・ステア、マーク・コスタビ、チャールズ・クロフ、マーティ・ジョンソン 他

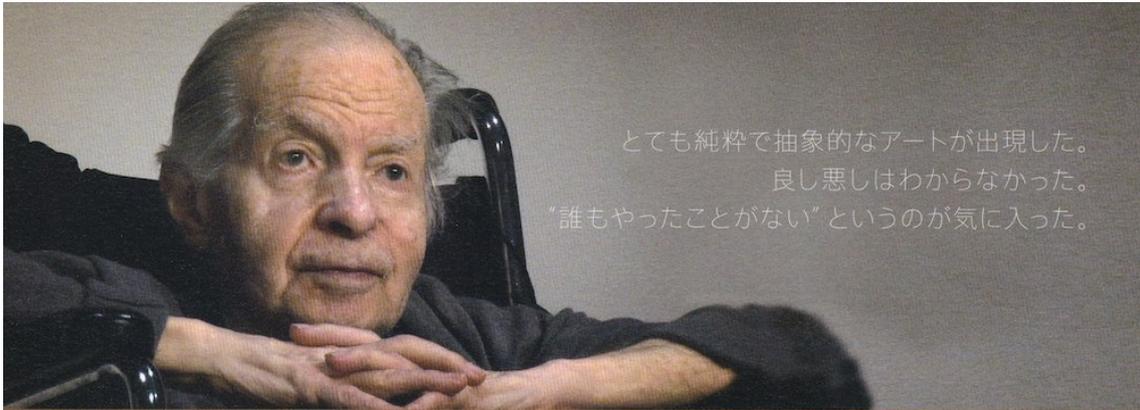
2013年/アメリカ/87分/カラー/英語/デジタル上映
【提供・配給】株式会社ファイン・ライン・メディア・ジャパン
【配給協力】ADEX 日本経済広告社、Playtime
【宣伝】Playtime
【協賛】三越伊勢丹/LVMH モエ ヘネシー・ルイ・ヴィトン/日興アセットマネジメント/日本M&Aセンター/ハイパーギア/グラフィス/両口屋是清/桂新堂

【宣伝お問い合わせ】
Playtime (斉藤) Tel&Fax: 03-3409-9178, Mobile: 080-3732-6809, Email: yosaito9@gmail.com
平井直子 Tel&Fax: 03-3409-9178, Mobile: 090-2670-5866, Email: hirainaoko0224@gmail.com
佐々木瑞都 Tel&Fax: 03-3409-9178, Mobile: 090-7405-6715, Email: white.aquamarine@gmail.com
市川靖子 Tel: 03-5456-9234, Mobile: 090-7947-1289, Email: ichikawa@artandstyle.org
※代表住所 〒150-0002 渋谷区渋谷1-3-18 ビラ・モデルナA-701 Playtime

2013年3月30日(土)より新宿ピカデリー、東京都写真美術館他、全国順次ロードショー!

Copyright © 2013 Fine Line Media, Inc. All Rights Reserved.

非売品



とても純粋で抽象的なアートが出現した。
 良し悪しはわからなかった。
 “誰もやったことがない”というのが気に入った。



私たちは結婚して45年、
 一緒にいなかった日は片手で数えられるだけ。
 何でも二人で一緒にやってきたわ。



監督からのことば [ハーブとドロシー、ふたりに見守られての完結編]

「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」は、私にとって「アート探しの旅」としてスタートしました。

映画を撮ろうと思ったのは、前作の「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」完成から半年後の2008年12月、インディアナ州でのことです。コレクションの寄贈を受けた美術館は、5年以内に展覧会を開く契約になっているのですが、どこよりも一番早く実現したのがインディアナポリス美術館でした。お2人が展覧会のオープニングに参加すると知ったので、記録として撮影した方がいいかも知れない、DVDの特典映像には使えるだろう、くらいの気持ちで同行しました。

「Collected Thought 一集積された思考」と題された展覧会を目にした時、私はそれまで2人のコレクションについて、作品を見極める力について、全く理解していなかったという思いに愕然としました。小品ながらも、静謐な美しさや気品が漂う作品群の前で、ひざまづきたい気持ちになったほどです。思い返すと、額に入って照明があたった美術館の展覧会で2人のコレクションを見たのは、その時が初めてだったのです。それは、あたかも有名俳優を4年間舞台裏で追いかけて記録しておきながら、肝心の舞台上で本番の演技を見たことがなかった、そんな気持ちでした。

2人のコレクションについて、アートについてもっと知りたい、そう思って撮り始めたのが「ふたりからの贈りもの」です。

寄贈先の美術館を訪ね歩き、2人のコレクションに出会い撮影するのは、とても楽しい体験でした。そして訪問する先々で「アートとは何だろう?」ということをよく考えさせられました。

しかし撮影がほぼ終わって編集段階に入った時、この物語をどう紡ぐのか、頭を抱えました。各地の美術館の特徴を出し、重複を避けるにはどうすればいいのか? 下手をすると、単なる美術館カATALOGになりかねません。編集者と議論を重ねて、構成やテーマを考え続けました。編集しながら描いていたのは、縦糸を50X50という寄贈プロジェクトに、横糸に2人の人生のその後やアートを巡るテーマを編み込んでいき、最後きれいなタペストリーが完成する、というビジョンです。

タペストリーが編み上がるまでもうすぐという時、2012年の夏に、ハーブが89歳でこの世を去りました。1人残されたドロシーにつきそい、支えながら、自分もしっかりしなければ、と悲しむ余裕もないまま緊張する日々でした。その間、「映画はどうなる?」ということを考える余裕は殆どありません。ハーブの死は想定していたものの、映画のテーマは変わらないので、方向性を大きく変えることはない、ハーブの死は、ほんのさわりだけ伝えれば、と自分に言い聞かせる毎日。ハーブの死が近づいても、すでに撮影済みの素材だけで映画を完成するつもりでした。後で思い返して、私は何て甘かったのだろう、監督失格だ、と深く反省し落ち込んだものです。

しかし、実際にハーブが亡くなってみると、予想外のことが起きました。ハーブのお葬式で、ドロシーは、コレクションの終了宣言をしたのです。「2人のコレクションは、ハーブと共に始まり、ハーブと共に幕を閉じた。だからアートのコレクションは全てナショナル・ギャラリーに引取ってもらい、アーティストからの作品も今後一切受け取らない」と。さらに、ハーブが亡くなって初めて明かされる事実がいくつかでてきました。そこで、10月に予定されていた映画祭での上映を断り、急遽予算と時間をかけて方向転換し、作り直そうと決めました。ハーブの死をしっかりとらえ、そこへ向けて内容も変更、追加撮影をして、4ヶ月近くかけて完成したのが「ふたりからの贈りもの」です。

アーティストのリチャード・タトルにインタビューを申し込んだ時、「新しい映画は、君の成長の記録になるかもね」と言われた事を思い出します。(結局リチャードはインタビューを受けてくれませんでした)

映画に限らず、作品づくりとは「作家の成長の記録を残す作業」なのかも知れません。

佐々木 淳生

Introduction

ドキュメンタリー映画「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」は、アメリカと日本をはじめ、世界中で話題を呼んだ前作「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」の続編として作られました。前作「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」は、NY在住のアートコレクター夫妻、元郵便局員のハーブと図書館司書のドロシーが、つましい給料で世界屈指のアートコレクションを築き、最後まで一点も売れる事なく、全てをアメリカ国立美術館に寄贈するまでを描いた物語です。数多くの映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞や観客賞を受賞した他、世界各国で劇場公開され、現在もアートフェア

や美術館などで上映が続いています。日本でも2010年から2011年にかけて、全国50箇所を超える劇場で上映されました。東京では、半年に及ぶロングランとなり、ドキュメンタリー映画としては異例の大成功を収め、数多くのメディアで大きく取り上げられました。「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」は、夫妻の人生とコレクションのその後を追う、いわば二人の物語の完結編です。NYの1LDKのアパートで始まったささやかなコレクションは、半世紀を経て5,000点近くまで増え、国立美術館でも収蔵しきれなくなり、全米50州に散っていきます。この前代未聞のアート寄贈計画を、夫妻及びアーティストはどんな思いで受けとめる

のか？ 地元への反応は？そして、ついにコレクションの幕は閉じられ、夫妻に別れの時が訪れるまでが描かれます。前作と同様、一見難解で近寄り難い現代アートの世界を、ハーブ&ドロシーという類い稀なコレクターの視点と、全米に散って行った二人の膨大な作品群を通して、くっつき身近に紹介します。「アートとは、一部の富裕層や知識人に限られたものではなく、誰にでも広く開かれたものであり、与え、共有することで、さらに豊かな体験ができる」「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」は、アートに込めた二人のメッセージを、国境や時代を越えて伝えていくための作品でもあるのです。

Story

「NYの1LDKの部屋から始まった二人のささやかなプランが、やがて歴史に残る大事業に」2008年春、前作「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」が完成する直前のごとき。二人はある計画を発表して世界をあっと言わせました。「ドロシー&ハーブ・ヴォーゲル・コレクション：50作品を50州に(50×50)フィフティ・バイ・フィフティ」と名付けたこのプロジェクトは、50作品を一括りとして、全米50州の各美術館に、合計2,500点を寄贈するというもので、アメリカのアート史上でも前代未聞のスケールで行われる寄贈プロジェクトでした。その中には、ソール・ルウィット、リチャード・タトル、ロバート・マンゴールド、ロバート・パヴィー、リンダ・ベングリスなど、20世紀を代表する総勢177人のアーティストの作が含まれています。ハーブ&ドロシーの物語は、今や現代のお話です。数千点のアートで埋め尽くされたNYの1LDKのアパートは、1980年代のアート界では、多くの関係者が一度は訪れる巡礼地として知られていました。その二人が世界的に有名なコレクターとして、後世に名前を残す結果となったのは、最後まで売らずにコレクションの全てをナショナル・ギャラリーに寄贈したことがきっかけです。1992年に寄贈のニュースが世界を駆け巡った時、皆これが二人の物語のハッピー・エンドだと信じていました。ところが16年後、ハーブとドロシーは、精力的にコレクションを続けた結果、気がつく

ても最大級の美術館である、収蔵先のナショナル・ギャラリーもお手上げ。引取れるのはおよそ千点が限界と判断しました。そこで、ハーブ&ドロシーとともに、作品の引取先を探して行きます。これが、50X50プロジェクトの始まりでした。映画「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」は、この歴史的なアートの寄贈プロジェクトを中心に展開します。カメラが向かう先は、コレクションを取った全米各地の10の美術館。ハワイやノースダコタ、モンタナなど、現代アートと殆ど接点のない地方も多く登場します。大人もたじろぐミニマル・コラージュ・アートの前で、自由に、活発に想像をめぐらせる子供たち。一方で「なぜこれがアートと言える？」「こんな絵ならうちの孫でも描ける」とつぶつぶ囁える大人。各地の反応を通して見ていくのは、今、美術界が直面している問題であり、挑戦でもあります。現代アートとは何か？ 私たちの住む社会にアートには必要なのか？ アートを、文化を支援し、後世に残すためには何が必要なのか、と映画は問いかけてます。また、夫妻と数十年にわたる交友を結んで来たアーティストたちは、この寄贈計画をどのように受け止め、彼らにどのような影響を与えたのでしょうか？二人のコレクションに所蔵されているのは、実は有名なアーティストだけではないのです。無名ながら、夫妻の励ましによって創作を続けてきたチャールズ・クロス、かつては一世風靡しながら、今はアート界からはじき出されたマーク・コスタビなど、映画では、

多彩なアーティストの面々が登場。そして長年親しくつきあってきたアーティストから、寄贈計画に対して意外な反応が返ってくるのも見所です。壮大な計画が進む一方で、高齢に達した二人は、50年前と同じNYのパートで、ひっそりとした年金生活を送っています。すっかりパソコンの操作にも慣れたドロシーは、グーグル・アラウドで寄贈先の美術館がいつ展覧会を開催するのかチェックし、車で移動できる範囲であれば、展覧会に足を運んだりもします。コレクションを完結させるために、1点の作品も売らないことを信条としていた二人は、全米にコレクションが散って行くことにどんな思いを寄せているのでしょうか。二人は、世間一般の評価やアート市場の価値に関係なく、自分達の目だけを信じて作品を買い集めました。そして、全てのアーティストを分けることなく、時には両親のように励ましながら親密な付き合いをしてきたのです。映画では、アーティストの知名度と作品の価値の関わりにも切り込んで行きます。そして、ついに二人の人生とコレクションに終止符が打たれる時が来ます。NYのささやかな1LDKのパートからスタートし、戦後最大規模の一つとなったコレクションと半世紀に渡る二人のパートナーシップは、どのように終わりを告げるのでしょうか？

[クラウドファンディングを利用した製作へのチャレンジ]

クラウドファンディングは、インターネットを使って、小額を多数の支援者から募り、アート、音楽、映画などのクリエイティブなプロジェクトを実現する、という画期的な資金調達とサポーター集めの方法です。一般の人々が気軽に参加できるという点で、文化支援における民主的なプロセスであり、欧米では、ここ2年ほどでかなり広まってきました。

私も「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」を製作するにあたって、この4年間、アメリカの多くの財団に助成金を申請したり、企業協賛をお願いして廻りましたが、その大変さは、ここでは言い尽くせないほどの、興味を持ってもらえるのは、20~30回に一度、という状況。そんな中で救われたのが、クラウドファンディングという資金調達の方法でした。アメリカで2011年の秋に、キックスターターというサイトを通じてご支援をお願いした結果、世界中の730人ものサポーターの皆さんから、8万7千ドルを超える資金援助を頂きました。そのおかげで、製作がストップしていた映画は、撮影を終え、編集をスタートすることができたのです。

クラウドファンディングは、まさに「ハーブ&ドロシー」のスピリットでもあります。二人は決して裕福ではありませんでした。でも、わずかな公務員の収入から、自分達が払える範囲で作品を買い集め、アーティストの成長をささえてきました。世界的な景気低迷が続く、公共、民間問わず、真先に予算カットされるのが文化プログラムです。アーティストが、活動を続けていくことがとても困難になっています。でも、この大変な時代だからこそ、私たちに生きる力を与えてくれるのが、表現者達の発信ではないでしょうか。私はこのクラウドファンディングというメソッドが、日本でも現実的なレベルで広まり、アーティスト、音楽家、映画監督、演劇、あらゆる種類の表現者がアイデアを実現し、発表するための手助けとして広まれば、どんなにすばらしいだろうと思います。

 <http://motion-gallery.net/>
「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」の募集は2013年2月12日まで

佐々木芽生 ささきめぐみ
監督・プロデューサー



青山学院大学弘文科卒。1987年渡米。以来NY在住。1990年初め、ベルリンの壁崩壊をきっかけに、激動の東欧へ単独で渡り、現地の様子を伝える写真とエッセイを読売アメリカで10週間連載するなど、フリーのジャーナリストとして活動。1992年NHKニューヨーク総局勤務。「おはよう日本」でNY金融情報を伝えるキャスター、世界各国から身近な話題を伝えるコーナー「ワールド・ナウ」NY担当レポーター、ニュース・ディレクターなどを勤める。1996年独立し、NHKスペシャル「世紀を超えて」「地球市場」「同時3点ドキュメント」などの大型シリーズを中心にテレビ、ドキュメンタリーの取材・制作に携わる。2002年、映像制作会社(株)ファインライン・メディア・ジャパンをNYにて設立。2008年、初の監督・プロデューサー作品「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」を発表。同作品は、世界で30箇所を超える映画祭に正式招待され、米シルバードックス、映画祭国際映画祭などで、



合計5つの最優秀ドキュメンタリー賞や観客賞を受賞。また、2009年6月、NYでの封切後、ドキュメンタリー映画としては異例の17週を超えるロングランを記録。その後、全米60都市、100を超える劇場、美術館で公開された他、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドで劇場配給された。日本でも、既存の配給会社を越え、自主配給によって2010年11月に、渋谷のシアター・イメージフォーラムにて劇場公開。同劇場では、公開2週間の観客動員記録を更新。歴代2位の興行成績を収めるなど異例の成功を収め、日本全国では50館以上で公開された。その後も、モスクワ、台北をはじめ、世界各国のアートフェアや美術館、TV局で上映・放送されている。現在は、続編にあたる本作「ハーブ&ドロシー ふたりからの贈りもの」を完成させた他、捕鯨問題をテーマとした長編ドキュメンタリー映画「THE WHALE MOVIE」製作に向けて取材を進めている。

photo: Katsuyuki Tanaka



人生こそが、
最高傑作！

A FILM by MIZUMI Sasaki
HERB & DOROTHY 50X50

ハーブ&ドロシーの ふたりからの贈りもの

[監督・プロデューサー] 佐々木 芽生
[出演] ハーバート&ドロシー・ボーゲル、
リチャード・タトル、クリスト、ロバート・バリー、
パット・ステア、マーク・コスタビ、
チャールズ・クロフ、マーティ・ジョンソン、他

[提供・配給] ファイン・ライン・メディア・ジャパン
[配給協力] 日本経済広告社、Playtime [責任] Playtime
2013年/アメリカ/87分/デジタル/カラー/英語
原題: Herb & Dorothy 50X50 (USA)
[協賛] 三越伊勢丹 / LVMH モエ ヘネシー・レイ・フイテン /
日興アセットマネジメント / ハルバーキア / 日本MLAセンター /
グラフィス / ANA / 興口屋建設 / 陸新堂
[後援] アメリカ合衆国大使館



Copyright © 2013 Herb and Dorothy, Inc. All Rights Reserved.

前作が 世界中でまさかの大ヒット!

おごく普通の市民から偉大なアートコレクターとなった夫婦ハーブ&ドロシー
ごく普通の郵便局員と図書館司書のハーブとドロシー夫妻が、つつましいお給料で好きな
アートを買ひ集め、やがて世界でも屈指のアートコレクションを築き、それらを1点も売る
ことなくアメリカの国立美術館に寄贈した実話を描いた前作「ハーブ&ドロシー アートの
森の小さな巨人」。まるで現代のおとぎ話のような実話は、世界中で驚きをもって迎えられ、
米国だけでなく日本でもドキュメンタリーとしては異例の大ヒットを記録しました。



夫妻がアートを選ぶときの基準



1 自分たちのお給料で
買える値段であること

2 1LDKのアパートに
収まるサイズであること

3 好きなアートを見つけるのに、
知識や理屈は必要ない



今度は 全米50州の美術館に合計2,500点ものコレクションを贈る旅に出た!

前作で増えすぎたコレクションを、無事に国立美術館へ寄贈したハーブ&ドロシー。だが、国立美術館でさえも
大量のアートの全てを受け入れられなかった。そこで急遽、全米50州の美術館に50作品ずつ、計2,500点を寄贈
するプロジェクトが持ち上がる。寄贈先の美術館はラスベガスからハワイ、ニューヨークまで個性たっぷり。
ふたりのコレクションは、全米各地でどう受け止められるのか?そして、45年間いつも一緒だった夫妻の別れも
近づいていた…。まさに「人生の完結編」ともいえる今作。いま、ハーブとドロシーが笑って泣ける冒険の旅に出る。

寄贈する美術館 インディアナポリス美術館/コロラド州、マイアミ美術館/フロリダ州、スミソニアン博物館
ニューヨーク州、モンクレア美術館/スピンアート美術館/カリフォルニア州、オハイオ美術館
ペンシルベニア州、ワシントン大学/ワシントン州、ボストン美術館/マサチューセッツ州、ボストン美術館
ペンシルベニア州、ワシントン大学/ワシントン州、ボストン美術館/マサチューセッツ州、ボストン美術館
ペンシルベニア州、ワシントン大学/ワシントン州、ボストン美術館/マサチューセッツ州、ボストン美術館

1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60

番号 1 Joseph Beuys 2 Michael Slesinger 3 Clark Gable 4 Richard
Diebenkorn 5 Michael Slesinger 6 Edda Reinout 7 Will Barnes 8 Stanley
9 Mark Kostabi 10 Richard Tuttle 11 John Nelson 12 Peter Schjeldahl 13 Lucio
Pozo 14 Edda Reinout 15 Nancy Arlan 16 Don Hazlett 17 Claudie
DeMolles 18 Charles Cough 19 Lynda Tompkins 20 Gary Stephan 21 Tom
Robinson 22 Carl Andre 23 Edda Reinout 24 Martin Wong 25 Jodi Bradley
26 Don Hazlett 27 Steve Krumpholtz 28 Lynda Tompkins 29 Mari Jutte Paik
30 William Morosoff 31 Ives Cohen 32 Barbara Stewart 33 Claudia de
Moron 34 Roy Lichtenstein 35 Barbara Ann Schreyer 36 Stewart Hitch
37 Richard Francisco 38 Mark Kostabi 39 Peter Schjeldahl 40 Carl
Francisco 41 Ronnie Landfield 42 Lawrence Weiner 43 Richard Tuttle



2013年/アメリカ/87分/カラー/英語/デジタル上映
[監督・プロデューサー] 佐々木 芽生
[出演]ハーバート&ドロシー・ボーゲル、リチャード・タトル、クリスト、ロバート・バリー、バット・ステア、マーク・コストabi、チャールズ・クロフ、マーティ・ジョンソン 他
[提供・配給] (株) ファイン・ライン・メディア・ジャパン [配給協力] ADEX (株) 日本経済広告社、Playtime 宣伝: Playtime